

別記様式第7号

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	千 種 彰 典
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授）村井万里子 副主査：（兵庫教育大学教授）吉川芳則 委 員：（兵庫教育大学教授）菅井三実 委 員：（鳴門教育大学教授）川上綾子 委 員：（鳴門教育大学教授）余郷裕次
3. 論文題目	言語を活性化して意味を探究する国語科授業の研究－小学校文学教材を通して－
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻言語教育連合講座 千種彰典 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和4年2月11日（金） 14時30分～15時00分 場 所：Z o o mによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、言語の教育である国語科授業につねに求められていながら、実際には達成のむずかしい「言語を拠点とする探究」を実現するための理論・方法を、具体的授業分析を通して明らかにする研究である。「言語を拠点とする“主体的追求”をすすめる学習」は、時代と場所を越えて優れた国語科授業において共通に認められる。ところが一方で、「読み」の授業ではとりわけ顕著に、「問題」や「話し合い」が上滑りになり「学習」が空回りしやすくなることも、多くの教師の広く実感するところである。本研究の著者は、20年に及ぶ小学校教員としての経験から、この問題を自他の国語科授業の解決すべき最大の問題として強く自覚してきた。 国語科の「読むこと」の指導が陥りやすい「空回り」と「表層化」を防ぐにはどうしたらよいか。本研究では、まず決め手となる概念として「探究」を措定し、「探究」の源として言語の文脈が形成する「場」に生じる「異化」という現象を措定した。「異化」が生み出す「学びの可能性・価値」を明らかにするとともに、「異化」を生み出す理論的構成要素を理論的・仮説的に捉え、それらを実際の「授業実践」に適用して確かめる分析・考察を行った。言語の文脈及び場に生じる「異化」は「ありきたりではない」言語の用い方特に文学作品に含まれる修辞法を含む様々な技法や、文脈中に生じる筋や論理の「矛盾」によって起こる。しかし読み手の感性が鈍磨して

いると、その「言語が起こす摩擦（異化）」に気づくことができず、文章の表面を読み飛ばしてしまうのである。上記の理論考察から、まず「異化」を生み出すには読み手の「感覚」と「論理」の両者が必要なのではないか、という仮説を引き出した。

次に、では実際に、学習者自身が「異化」の起こるべき場所をどのように発見して「問い」を追求しながら文章の「意味」を探究していくのか。本研究では国語教育史上の業績から、「探究」の原理を内包しているとみられる「教材研究」や「理論」「授業実践」を取り上げて考察した。

まず、「量的研究」として、子どもと教師の発言が活発にやりとりされ「読みが深まっている」と直感できる授業実践を取り上げ、授業の前半では「表象的トランザクション：表面的な発言間の関係」が多く、後半に「拡張・矛盾・精緻化・統合」などの「操作的トランザクション」が増えていることが量的に明らかになった。また、1時間ではなく複数の学期・学年にわたる記録が残され、子どもの成長が直感的に認められている授業の記録を対象に「質的研究」を行った。具体的には、戦後国語教育史上に著名な斉藤喜博氏の流れを汲む民間教育団体「授業研究会」に蓄積されている「授業記録」の中から、教材や子どもの成長が連続して捉えられる資料を厳選して「M-GTA（修正・グラウンデッド・セオリー）」による分析・考察を行った。この「M-GTA分析」を行うことによって、「①問題を自覚するカテゴリー」→「②事実を探究するカテゴリー」→「③問題を解決するカテゴリー」の「プロセス」関係と、「感覚（イメージ）」と「論理」を同時に用いる「直観」を核とする「言葉による探究カテゴリー」を中央に置き、「自己を探究するカテゴリー」を基盤に、上記「プロセス①②③」を上部に位置づける「探究する読みの学習」の内実を表す「全体概念構造図」を構築することができた。これによって、国語科授業の現況に広く見られる「浅い表面読み学習」の問題状況を克服する有力な手がかりの一つが明らかにされた。

本研究の論文構成は、以下のとおりである。（章レベルまで記述）

序論 文学教材を読むことの問題を研究（1～4節） pp4－115

第1章「探究する授業」の構成要素（1～4節） pp116－163

第2章 文学教材の授業における「探究」（1～5節） pp164－317

第3章 同一学級における文学教材の授業－「探究」プロセスの分析を通して（1～3節）
pp318－367

結論 言語を活性化して意味を「探究」する読解授業の総括と展望（1～2節） pp368－377

資料1～4（片山教諭の授業関係資料とM-GTAによる分析シート） pp378－464

2. 審査経過

審査に先立ち、2月11日（金）14時より30分間、Zoomによる公聴会を行った。審査委員5名は、予め送付されたハンドアウトと、パワーポイント資料を精読し、当日はさらにわかりやすく改訂されたパワーポイント資料をZoomの資料共有により参照しながら聴講（資料共有のための電波状況が悪く十数分、待ち時間が生じた）。公聴会の後引き続き審査が行われ、質問・意見が交わされた。

（1）研究の目的の確認と論文構成の対応について

次のような質問・意見が出され、応答が行われた。

①「序論」「結論」は、「序章」「結章」の方が適切ではないか。②「序論」が4節110頁に及ぶ理論考察は短く簡潔にした方がよいのではないか。研究の「リサーチ・クエスチョン」が短く絞り切れているか。③文学教材を対象にしながら「文学教育」研究ではないのはなぜか。

①②に対しては、長年小学校教諭として勤務し理論については連合大学院で初めて本格的に学び自ら探索したものが多く、十分重点化して絞りきれぬ時間的余裕がなかった。「リサーチ・クエスチョン」は主観的には明確であるが、それを読み手にもわかるように自分でも過不足のない具体的文章として記述することはいまだ達成できていない。

「序論」は確かに短めの印象を与えるので「序章」とすべきであった、と応じた。③については「言語の活性化・異化」を引き出すには「文学作品の文章」が他の文章よりも「異化」を引き起こす上で適切・効果的であることが多いために採択しており、いわゆる「文学教育」研究ではなく「文学作品の文章を用いた、言語教育」である旨が示された。このことに関して、論文題目の副題「小学校文学教材を通して」に反映されているとみられる、という委員の発言があった。

(2) 研究の独創性と発展性・学校教育の実践への貢献

全教科を教える小学校教諭の多くが「国語科授業」に感じている、「上滑りになりやすい、読みの学習指導」の問題に正面から取り組み、言葉に仕組まれた「違和感」を引き起こす仕組みに敏感にかつ正當に反応する力を、教師・児童ともに育てることが重要であることを、理論的・実証的に明らかにした。

この成果は、「学校教育実践の基礎に培う」と位置づけられている「国語科指導」を着実に力強いものにするために有力な貢献を行うことが期待できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は千種彰典の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。